

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0480 ◆◆◆

18/04/25

## 【 敢えて「ドル安リスク要因」2つを指摘する 】

為替市場でドル強気ムードが急速に高まっている。テクニカルには、先週の当レポートで報じた攻防の分岐点である 108 円レベルをしっかりと回復したことが大きい。材料的には「米中貿易戦争懸念」や「シリア情勢」、「安倍政権不安」、「北朝鮮情勢」、「日米首脳会談」、「G20 財務相・中銀総裁会議」一などといった円買い支援要因の多くを取り敢えず消化したことが影響している感も否めない。したがって、しばらくはドル高・円安傾向が続きそうな気配なのだが、幾つかのリスク要因もくすぶり続けたままだ。そこで、今回の当レポートでは、ドル戻り高基調のなか「敢えての逆張り」、根強くはびこる「日米貿易問題」を除いてもなお存在する「ドル安リスク要因」2つを取り上げてみたい。

### << 北朝鮮情勢 >>

先週後半ぐらいから、南北や米朝の融和観測が急速に高まっている。周知のように、背景にあるのは、「北朝鮮が核実験とICBM発射実験中止、核実験場も廃棄」としたニュースであり、そののちヘラルド紙は「北朝鮮の金委員長、米国による核実験場の査察を受け入れ」一などと報じるなど、薄気味が悪いほどの従順さだ。

もちろん、北朝鮮のこうした態度を 100%否定しないが、筆者のように「若干の胡散臭さ」あるいは不信任感を抱く向きも少なくない。たとえば、トランプ米大統領にしても、前述した「核実験など放棄」とのニュースが伝えられた際の初期反応は「大きな前進で良いニュース」と手放しだったものが、そののちのツイッターへの書き込みを見ると「非核化という結末は遠い。うまくいくかもしれないし、いかないかもしれない」と明らかにトーンダウンしている。冷静になって考えてみると、やはり北朝鮮一流のブラフ(はったり)であると疑心暗鬼にとらわれている可能性も否定出来ないだろう。

そうしたなか、今週末 27 日に南北首脳会談が開催される予定で、これについてもマーケットの期待感はかなり強い。ちなみに、注視されているのは会談を受けて発表される「共同宣言」をメインとした合意内容。ポジティブな内容となれば、為替市場は取り敢えずドル買い先行で反応する公算が大きいだろう。しかし、たとえどんな素晴らしい合意内容であっても、それを必ずしも北朝鮮が守るとは限らないことは過去の歴史が証明済みだ。市場では依然として楽観的な見方が優勢であるだけに、仮に「ハシゴ」が外されたことになれば、再びリスク回避志向が強まることになりかねない。

### << シリア情勢 >>

日本時間の今月 14 日、米英仏がシリア攻撃に踏み切ったが、マティス米国防長官が「攻撃は 1 回限り」と発言したことを受け、為替市場では逆にリスク回避志向が緩む展開となっている。しかし、米国ではトランプ大統領がツイッターに投稿した「mission accomplished(任務完了)」という表現が波紋を広げ、逆に戦闘継続を示唆しているとの深読みをする声も少なくないようだ。

これは、2003 年 5 月 1 日、当時のブッシュ大統領がイラク戦争での事実上の勝利宣言をした際、空母「エーブラハム・リンカーン」の上で「イラクの戦いで米国と同盟国は打ち勝った」と事実上の勝利宣言をした。演説するブッシュ氏の背後に「任務完了」と書かれた横断幕が掲げられていたため、演説は「任務完了演説」とも呼ばれるようになったものの、結果としてそののちも多くの犠牲者をとまなう戦闘が続いたことを下地としている。つまり、トランプ氏が当時のブッシュ氏と同じ轍を踏むのではないかの懸念を呼んでいるわけだ。そのため、米紙NYタイムズも「ブッシュ政権以来、政治家が避けてきた言葉をトランプ氏は敢えて使用した」と、その言動に疑問を投げかけている。

そうでなくとも、ただでさえ冷戦状態となっていた対中あるいは対露との関係が、シリア情勢をめぐりさらに冷え込みの様相を呈していることは気掛かりだ。急激なドル売り要因とはならないまでも、為替市場では折につけドルの上値を抑制する要因として浮上してくる可能性は否定出来ない。(了)



当レポートは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

